

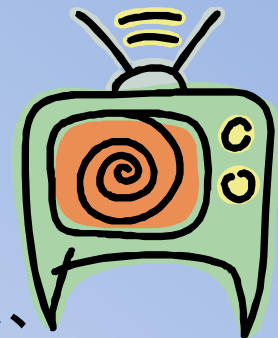
農薬問題をどう伝えるか？

2014年9月16日
農薬に関するリスクコミュニケーション

NHK解説委員室
合瀬宏毅

1

関心高い食の問題



- テレビ局の定番、困ったときの健康、グルメ番組
- 食品、飲料の広告費 年間4800億円 化粧品を押さえ、シェア17%とダントツ(電通)
- 食の安全安心問題は、テレビ・新聞にとって「数字のとれるテーマ」

2

食を巡る事件事故

- 2000年 雪印乳業による集団食中毒事件 1万5千人の患者発生
- 10月 安全性未審査の遺伝子組み替えトウモロコシ、スターリンクを広範囲で検出
- 2001年
- 9月 国内初のBSE感染牛みつかる
- 2002年
- 1月 雪印食品の食肉偽装事件が発覚
- 3月 全農の子会社「全農チキンフーズ」の鶏肉偽装事件が発覚
- 6月 協和香料化学の無認可添加物使用で、商品自主回収広がる
- 7月 残留農薬問題で、中国産の冷凍ハウレンソウ輸入自粛を要請
- 8月 全国の農家でダイホルタンなど「無登録農薬」の使用が露見
- 2003年
- 2月 イオンがアレルギー物質混入でプリマハムを告発
- 6月 厚労省が魚の水銀基準を発表し、消費者の間で金目鯛など買い控え
- 7月 食品安全委員会が発足。
- 12月 アメリカでBSE感染牛、アメリカ産牛肉の輸入禁止
- 2004年
- 1月 山口で79年ぶりに鳥インフルエンザ発生
- 1月 アジア各地に鳥インフルエンザ拡大。各国から輸入禁止へ

3

- 2005年12月 アメリカ産牛肉の輸入再開
- 2006年 5月 農薬がポジティブリスト制へ
- 2007年
- 3月 不二家で消費期限切れの牛乳などを使用して回収へ。
- 6月 ミートホープ社が挽肉偽装
- 2008年
- 1月 中国産冷凍ギョーザに毒物混入。10人が入院
- 10月 政府売り渡しの汚染米が食用として流通していることが発覚
- 2009年
- 9月 花王が食用油「エコナ」の販売停止
- 2010年
- 4月 宮崎で口蹄疫、大量の牛豚を処分へ
- 12月 野鳥の間でも鳥インフルエンザが大流行
- 2011年
- 3月 東日本大震災で原発事故、食品の放射性物質汚染広がる
- 5月 ユッケによる食中毒で5人が死亡
- 2012年
- 7月 レバ刺し禁止
- 8月 白菜浅漬け、0157汚染で7人死亡
- 2013年
- 11月 メニュー偽装 全国で発覚
- 12月 アクリフーズで農薬混入

4

食を巡る環境の変化

1. 食料の6割が海外から。高くなる加工度
 2. 加速する大量生産・大量流通
 3. 先端科学が食卓へ(遺伝子組み換え)
 4. 自然志向の高まり
 5. 消費者の感覚も鈍感に
- 検査精度の向上(一兆分の1まで検出可能に)

5

専門家と消費者の考え方の違い



科学的に考える
統計を重視
食中毒のリスク



長期的影響への不安
出てきたときには手遅れ
いつの間にか広がっている
BSE・遺伝子組み換えは×
レバ刺し○

6

健康意識の高まり



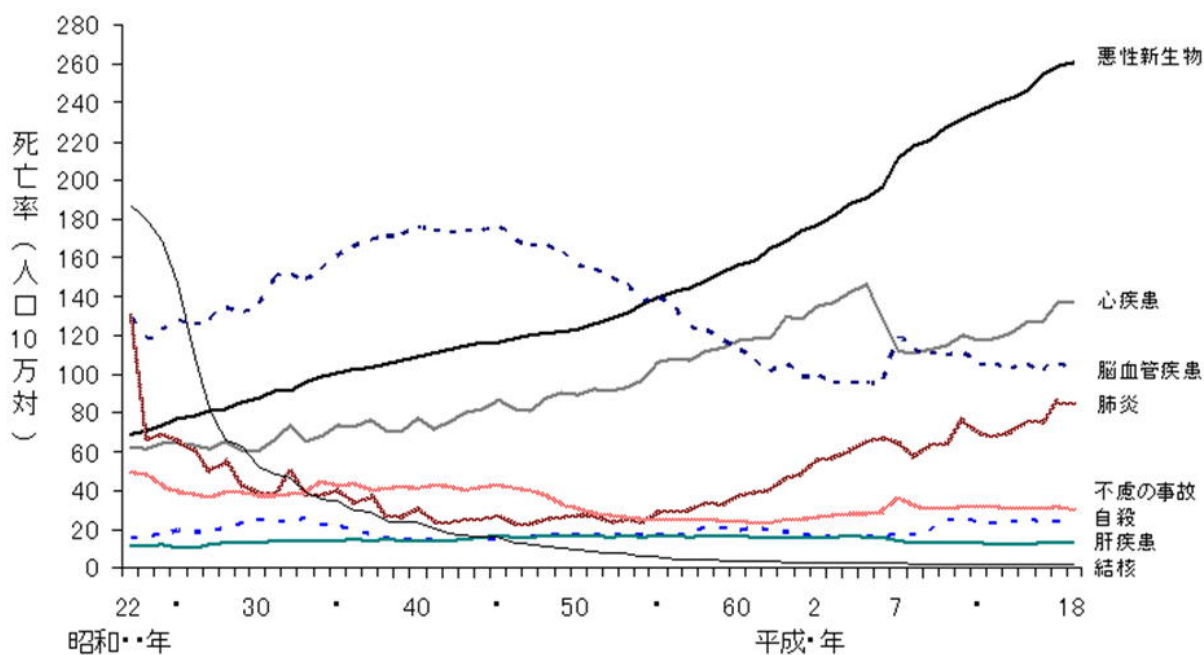
「糖尿病が強く疑われる人」
890万人

「糖尿病の可能性を否定できない人」の1,320万人を合わせると、全国に2,210万人



中性脂肪やコレステロールが高い脂質異常症の人は、潜在患者も入れると、2,200万人

感染症から慢性疾患の時代へ



注：1) 平成6・7年の心疾患の低下は、死亡診断書(死体検案書)(平成7年1月施行)において「死亡の原因欄には、疾患の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください」という注意書きの施行前からの周知の影響によるものと考えられる。
2) 平成7年の脳血管疾患の上昇の主な要因は、ICD-10(平成7年1月適用)による原死因選択ルールの明確化によるものと考えられる。

- 時代は治療から予防へ
 - ガンなど慢性疾患は複合的な要因から来る病気
 - 化学物質、放射能、ウイルス、遺伝的要因だけでなく、コレステロール、肥満、喫煙、ストレス、運動不足、不規則な食事など原因は多岐に。
 - 健康で長生きしたい
- ・できるだけリスクを避けた生活がしたい

現代は漠然とした不安の時代

9

消費者にどう報道？

△平時の対応

農薬は危険ものであることが前提
使用によるメリットを説明

△問題が起きたときの対応

まずは事態の把握
毒性などきちんと説明する
構造的な問題かどうか

10